

【タイ】コロナ禍におけるタイの子どもたちのレジリエンスとハピネス(QOL)に影響を及ぼす要因

シリティダ・チンサングシップ¹/サシラック・カヤンキジ准教授(博士号)²

¹カエンチャン・ヴィッタヤ校

²チュラロンコン大学

はじめに

タイでは、新型コロナウイルスの継続的な感染拡大に伴い、2020年に保健省による感染予防と拡大防止政策が導入された。その結果、学校も閉鎖や活動制限を余儀なくされ、学校の授業や活動はオンラインまたはハイブリッド型(オンラインと登園／登校の組み合わせ)で行われるようになった。こうした変化は子どもたちや家族の日常生活に大きな影響を及ぼした。タイの子どもたちはその多くが屋外で遊べる場所のない地域に住んでいる。さらに、オンライン学習は子どもと親の双方の身体面および精神面の健康に悪影響を及ぼすことが指摘されていた。国際連合児童基金(UNICEF)が2020年に行った調査によると、パンデミックが始まって以来、タイの児童・青少年の70%がオンライン授業(または学級閉鎖)によって心理的な問題(ストレス、不安、倦怠など)を抱えていることが明らかになっている。

新型コロナパンデミックにおける子どもの調査によって、子どもたちのストレスレベルが上昇し、社会的不平等が拡大していることが判明した。これは世界中の問題でもある。パンデミックに起因する経済および社会の混乱は子どもたちを危険に晒しており、その結果、貧困、栄養不良、児童虐待、育児放棄、不安、うつ病、教育格差を引き起こしている(Fry-Bowers, 2020)。特に乳幼児や未就学児に関しては、フラストレーション、かんしゃく、遊んでいる最中の注意散漫、攻撃性、無理難題の主張、継続的な身体的接触の必要性、睡眠障害などの好ましくない行動が増えていることが明らかになっている。

こうした問題行動は、教師やクラスメートとオンライン上でのみ交流するしかない幼児のストレスを反映している。この状況によって親の責任が重くなり、否定的な養育態度につながっている(Imran, et al., 2020)。子どもたちの遊びもパンデミックやソーシャルディスタンス政策によって変化した。過剰なストレスに晒された親が子どもの屋外の遊びや活動に主な責任を負う

ことになったため、子どもたちは一人遊びや平行遊びに多くの時間を費やすようになった(Nakchuen & Khayankij, 2021)。さらに、長期的な心身の発達を促すために必要不可欠である「安全な環境」で暮らすということすらできなくなってしまった子どももいる。

CRN アジア子ども学研究ネットワーク(CRNA)では、子どもが成長するうえで成功の基盤となる社会情動的ウェル・ビーイングの発達の重要性を研究している。CRNAの研究は、1) 家庭、2)園／学校、3)地域社会／国の3つの要因に重点を置いており、タイ、日本、中国、台湾、インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポールの8カ国を対象に調査を行った。

このレポートでは、コロナ禍におけるタイの子どもたちのハピネス(QOL)とレジリエンスに影響を及ぼす要因について分析する。本研究は、子どもたちの幸福と健康を促進する最適な方法、すなわち、子どもの将来を左右するレジリエンスとハピネスの発達を促す健全な環境をどのように構築していけばよいかを検討することを目的としている。

調査方法

本調査のデータはパンデミックの最中である 2021年10月にオンラインで収集した。調査対象者は、2021年に公立幼稚園／学校に入園／入学した5歳児の母親と7歳児の母親という2つのグループに分けた。調査の対象となった園／学校はバンコク首都圏の6区にある6校で、新型コロナウイルスの感染拡大リスクが高いことからオンライン授業が行われていた。調査対象者の大半は、ロックダウンが実施されている地域に住んでいた。サンプルサイズは誤差 0.5の無限母集団を用いて計算し、少なくとも 385 名の母親とした。各グループから 250 名の母親、合計 500 名の母親からデータを収集し、回答率は全体で 403 名(80.6%)、うち5歳児の母親が183名(73.2%)、7歳児の母親が 220 名(88%)であった。サンプルの分析には層化無作為抽出法を用いた。

各グループの母親たちに対して2種類のアンケート調査を行った。質問の内容は、「家庭」、「園／学校」、「地域社会／国」という3つの観点から問うものであった。質問は全部で154項目あり、子どもとその家族に関する一般的な情報、コロナ禍における家族の状況、子どもの

ハピネス(QOL)とレジリエンス、母親の養育スタイル、母親の子育て観と新型コロナに対する不安、配偶者のサポート、学校のサポート、子どもの情報通信技術(ICT)の活用、親の関わりとICTに対する意識、子どもの日常生活と遊びに関するものである。5歳児と7歳児のグループに対して行ったアンケート調査は、5項目の質問を除き、同じ内容とした。この2種類のアンケートの内容妥当性は極めて高く、5歳児の母親に対するアンケートの項目目標一致指数(IOC)は0.98、7歳児の母親に対するアンケートでは0.99であった。アンケート調査をオンラインで実施してデータを収集する前に、オンライン承諾フォームを調査対象者に配布し、承諾を得たものである。データ分析には、固有値解析、比率分析、標準偏差、t-検定、ピアソン相関を用いた。

調査結果

2つのグループの母親たちに関するデモグラフィックデータ

調査対象の5歳児の母親たちは、その大半がロックダウンの実施されている地域(88.53%)に、配偶者(77.05%)と子ども(66.12%)と一緒に住んでいた。母親たちの約50%は2人の子どもがあり(48.09%)、調査対象児は第1子(50.27%)であった。母親たちの最終学歴は学士号が最も多く(40.98%)、約40%の母親がフルタイムで働いていた(38.80%)。また、母親たちの配偶者の約40%が学士号を取得しており(40.98%)、約40%がフルタイムで働いていた(40.44%)。彼らの経済状態は貧しく、約3分の1が13,000~26,000バーツ(約48,000~97,000円)の世帯月収にとどまっていた(35.52%)。さらにコロナ禍によって大半の家庭は世帯収入が減少していた(65.03%)。5歳児の母親たちがワクチンを受けている比率は極めて高い(93.99%)にもかかわらず、その半数以上が新型コロナに対する強い不安感を示しており(58.47%)、約半数が政府のパンデミック政策に不満を持っていた(46.45%)。母親たちの約40%が政府機関から何のサポートも受けていないと答えている(39.34%)。

7歳児の母親たちは、その大半がロックダウンの実施されている地域(81.82%)に、配偶者(80%)と子ども(70%)と一緒に住んでいた。母親たちの約50%は2人の子どもがあり(51.36%)、調査対象児は第1子(51.36%)であった。母親たちの最終学歴は学士号が最も多く

(42.27%)、約40%の母親がフルタイムで働いていた(41.91%)。母親たちの配偶者に関しては、学士号を取得している者は少ないが(27.27%)、約40%がフルタイムで働いていた(41.36%)。彼らの経済状態は貧しく、約30%が13,000～26,000バーツの世帯月収にとどまっていた(28.18%)。さらにコロナ禍によって大半の家庭は世帯収入が減少していた(60.91%)。7歳児の母親たちがワクチンを受けている比率は高い(86.83%)にもかかわらず、その60%以上が新型コロナに対する強い不安感を示しており(63.4%)、40%以上が政府のパンデミック政策に不満を持っていた(42.27%)。また、母親たちの50%以上が政府機関から何のサポートも受けていないと答えている(50.45%)。

調査対象児(5歳と7歳)に関するデモグラフィックデータ

調査対象の5歳児に関しては、約半数が男子(50.82%)で、約40%が5歳～5歳2ヵ月(41.53%)、約50%が第1子であった(50.27%)。

これら5歳児の4分の1以上が夜に9～10時間寝ており(27.37%)、4分の3以上が母親を主な遊び相手としていた(77.60%)。また、4分の1以上は母親と屋外で毎日4時間以上遊び、屋内で30分遊んでいた(29.51%)。

5歳児のうち約4分の1がテレビを含めたデジタルメディアを1日当たり1時間視聴しており(22.95%)、スマートフォンを1日当たり1時間使用していた(24.04%) [これらの5歳児の20%強がタブレットを使用していなかった(21.31%)]。調査期間中、5歳児の約4分の1が1日当たり1時間家で勉強し(24.59%)、1週間に2度、習い事のレッスンを受けていた(26.23%)。一方、地元の地域社会活動には大半が参加していなかった(63.39%)。これは、コロナ禍によって行動制限を受けていることがおそらく原因と思われる。

調査対象の7歳児に関しては、約半数が男子(51.82%)で、4分の3近くが7歳～7歳2ヵ月(73.18%)、約50%が第1子であった(51.36%)。

7歳児の3分の1が夜に9～10時間寝ており(33.64%)、約70%が母親を主な遊び相手としていた(70.91%)。また、約4分の1が母親と屋外で毎日1時間遊び、3分の1が屋内で毎日30分遊んでいた(33.18%)。

7歳児のうち約4分の1がテレビを含めたデジタルメディアを1日当たり1時間視聴しており(24.09%)、スマートフォンを1日当たり1時間使用していた(23.18%)。[これらの7歳児の約30%がタブレットを使用していなかった(29.07%)] 調査期間中、7歳児の約3分の1が1日当たり4時間家で勉強し(32.73%)、4分の1が1週間に2度、習い事のレッスンを受けていた(25.46%)。一方、地元の地域社会活動には大半が参加していなかった(61.36%)。これは、コロナ禍によって行動制限を受けていることがおそらく原因と思われる。

7歳児の母親の半数以上が、我が子のオンライン学習の成果が適度なレベルであると考えており(57.27%)、また、タイ語と算数の成績も適度なレベルであると答えている(タイ語: 53.64%、算数: 52.27%)。

育児や子どものハピネス(QOL)とレジリエンスに対する母親の考え

子どものハピネス(QOL)とレジリエンスに関連する項目として、「母親の養育態度」、「母親の子育て意識と新型コロナに対する不安」、「配偶者のサポート」、「学校のサポート」、「子どものICT活用」、「親のICTに対する意識と関わり」、「子どもの日常生活と遊び」を分析した。

1. 子どものハピネス(QOL)

データを収集している期間中、子どものハピネスの平均値は両グループとも高かった(5歳児: 平均 = 4.09、標準偏差 = 0.28、7歳児: 平均 = 3.95、標準偏差 = 0.35)。下位項目に関しては、「身体面の健康」が最も高い平均値(5歳児: 平均 = 4.31、標準偏差 = 0.14、7歳児: 平均 = 4.27、標準偏差 = 0.10)を示す一方で、「日常機能」が最も低い平均値を示した(5歳児: 平均 = 3.80、標準偏差 = 0.05、7歳児: 平均 = 3.67、標準偏差 = 0.12)(表1を参照)。

表1:コロナ禍における子どものハピネス(QOL)(平均値・標準偏差)

項目	5歳児		7歳児	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
子どものハピネス	4.09	0.28	3.95	0.35
身体的QOL	4.31	0.14	4.27	0.10
心理的QOL	4.26	0.05	4.10	0.07
自尊感情	4.03	0.07	3.88	0.03
家族関係のQOL	4.16	0.04	4.07	0.13
友達関係のQOL	3.95	0.05	3.71	0.05
日常機能(園/学校)	3.80	0.05	3.67	0.12

2. レジリエンス

データを収集している期間中、子どものレジリエンスの平均値は両グループとも高かった(5歳児:平均 = 4.14、標準偏差 = 0.73; 7歳児:平均 = 4.04、標準偏差 = 0.80)。下位項目に関しては、「パーソナルレジリエンス」が最も高い平均値(5歳児:平均 = 4.33、標準偏差 = 0.04; 7歳児:平均 = 4.23、標準偏差 = 0.04)を示す一方で、「保護者・養育者レジリエンス」が最も低い平均値を示した(5歳児:平均 = 4.00、標準偏差 = 0.06; 7歳児:平均 = 3.91、標準偏差 = 0.06)(表2を参照)。

表 2:コロナ禍における子どものレジリエンス(平均値・標準偏差)

項目	5歳児		7歳児	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
子どものレジリエンス	4.14	0.73	4.04	0.80
パーソナルレジリエンス	4.33	0.04	4.23	0.04
保護者・養育者レジリエンス	4.00	0.06	3.91	0.06

3. 養育態度

母親たちが回答した「養育態度」の平均値は両グループとも高い水準であった(5歳児の母親:平均 = 3.43、標準偏差 = 0.61; 7歳児の母親:平均 = 3.41、標準偏差 = 0.65)。下位項目に関しては、「親の応答的な関わり」の平均値が高く(5歳児の母親:平均 = 3.65、標準偏差 = 0.08; 7歳児:平均 = 3.64、標準偏差 = 0.10)、「懲罰的ではないしつけ」がこれより低かった(5歳児の母親:平均 = 2.92、標準偏差 = 0.04; 7歳児:平均 = 2.86、標準偏差 = 0.09)。

4. 母親の子育て意識と新型コロナに対する不安

子育てで重視していることに関する母親たちの回答は両グループとも高い平均値を示している(5歳児の母親:平均 = 3.68、標準偏差 = 0.10、7歳児の母親:平均 = 3.66、標準偏差 = 0.11)。下位項目に関しては、「社会情動面のスキル」が最も高い平均値(5歳児の母親:3.72、7歳児の母親:3.71)で、社会情動面以外の「その他(習い事や様々な体験をすることを重視)」の側面(5歳児の母親:3.67、7歳児の母親:3.64)が、それに続いた。

コロナ禍の状況下にある母親たちの生活に対する満足度についても、両グループとも高い平均値であった(5歳児の母親:4.43、7歳児の母親:4.47)。下位項目に関しては、「自分の子育てについて満足している」の回答の平均値が最も高く(5歳児の母親:4.63、7歳児の母親:4.68)、その反面、「仕事と家庭生活のバランスに満足している」は最も低い平均値となっていた(5歳児の母親:4.19、7歳児の母親:4.26)。

5. 配偶者/パートナーのサポート

配偶者/パートナーとの関係に関する回答の平均値は両グループとも高かった(5歳児の母親:平均 = 3.16、標準偏差 = 0.19; 7歳児の母親:平均 = 3.11、標準偏差 = 0.22)。下位項目に関しては、「子育てのサポート」の平均値(5歳児の母親:平均 = 3.18、標準偏差 = 0.08; 7歳

児:平均 = 3.13、標準偏差 = 0.07)が、「精神面でのサポート」の平均値(5歳児の母親:平均= 3.14、標準偏差 = 0.04; 7歳児:平均 = 3.09、標準偏差 = 0.05)をやや上回っていた。各項目を比較すると、最も高い平均値であったのは「コロナ流行への対応を一緒に考えてくれる」であった(5歳児の母親:平均=3.39、標準偏差=0.90; 7歳児の母親:平均=3.40、標準偏差 = 0.90)。

配偶者の日常生活におけるサポートは、1)育児と 2)家事の2つの活動で評価を行った。その結果、以下に示すように、7歳児の母親たちの方が高いスコアを示していることが明らかになった。

- (1) 5歳児の母親たちの31.35%は、配偶者/パートナーの育児への関与度が80～90%であると回答している一方、7歳児の母親たちの31.36%は、配偶者/パートナーが完全に育児をサポートしてくれている(100%)と回答している。
- (2) 5歳児の母親たちの28.96%は配偶者/パートナーが家事を手伝う時間は全体の50%のみであると回答しているのに対し、7歳児の母親たちの25%は配偶者/パートナーが完全に家事を分担していると回答している。

6. 幼稚園/学校のサポート

調査が行われたパンデミックの期間中、子どもたちの大半が幼稚園/学校からハイブリッド型(オンラインと登園/登校の組み合わせ)の保育/授業を受けていた(5歳児= 62.29%; 7歳児=54.09%)。先生のサポートに関する母親たちの回答は、両グループとも極めて高い平均値を示している(5歳児の母親:平均=3.68、標準偏差=0.60; 7歳児の母親:平均=3.59、標準偏差 = 0.53)。

7. 子どもの ICT 活用および親の関わりと ICT に対する意識

7.2 ICT 使用時間の割合

ICT 使用時間の割合は、両グループとも約 60%であった(5歳児 = 62.23%; 7歳児 = 60%)。子どもたちが ICT を活用している主な活動は、「動画を視聴する」(5歳児 = 46.45%; 7

歳児 = 53.18%)、「お絵描きをする(塗り絵を含む)」(5歳児 = 43.17%; 7歳児 = 45%)、「音楽を聴く」(5歳児 = 43.72%; 7歳児 = 43.64%)、「ゲームをする」(5歳児 = 36.07%; 7歳児 = 42.27%)、「園や学校の宿題をする」(5歳児 = 48.09%; 7歳児 = 56.36%)、「オンライン授業を受ける」(5歳児 = 40.44%; 7歳児 = 50%)であることが明らかになった。

7.2 子どものデジタルメディア活用時の親の態度と関わり

子どものデジタルメディア活用時における親の関わりについては、両グループとも高い平均値を示している(5歳児の母親:平均 = 2.97、標準偏差 = 0.22; 7歳児の母親:平均 = 2.96、標準偏差 = 0.18)。下位項目に関しては、両グループとも、「子どもが難しいことに取り組めるよう支援する」ことが最も重要であると回答している(5歳児の母親:平均 = 3.24、標準偏差 = 0.68; 7歳児の母親:平均 = 3.21、標準偏差 = 0.77)。

コロナ禍以前と比べて、子どものデジタルメディア活用に対する母親の抵抗感がどう変化したのかについては、以下の結果となった。

- (1) 5歳児の母親たちの 46.45%は、これまでに子どもが娯楽のツールとしてデジタルメディアを使用していることに抵抗を感じたことはなく、現在も感じていないと回答しているのに対し、7歳児の母親たちの 40.45%は、コロナ禍以前は抵抗を感じていたが、パンデミック中に抵抗感が薄れてきたと回答している。
- (2) 5歳児の母親たちの 46.99%と7歳児の母親たちの 41.82%は、これまでに子どもが学習ツールとしてデジタルメディアを使用していることに抵抗を感じたことはなく、現在も感じていないと回答している。

8. 子どもの日常生活と遊び

データを収集している期間中、子どもたちの半数以上は屋外で遊ぶ時間が減っていた(5歳児 = 54.65%; 7歳児 = 60.91%)。5歳児の3分の1以上は屋内で遊ぶ時間が増え(37.71%)、7歳児の約40%は屋内で遊ぶ時間が変わらなかった(39.09%)。両グループとも、約3分の1が毎日少なくとも

30 分間、屋外で遊んでいた(5歳児=32.15%; 7歳児 = 35.43%)。5歳児と7歳児には学習タスクの差異があり、そのことある程度、屋内で遊ぶ時間と学習する時間の差異につながっていると思われる。5歳児の4分の1以上が毎日4時間以上、屋内で遊んでいる(27.32%)のに対し、7歳児の3分の1以上は毎日1時間のみ屋内で遊んでいる(34.45%)。また、5歳児の約40%が毎日1時間勉強している(38.80%)のに対し、7歳児の約3分の1が毎日4時間勉強している(32.73%)。

5歳児のレジリエンスとハピネス(QOL)に影響を及ぼす要因

5歳児のレジリエンスとハピネス(QOL)の間には、適度な水準の正の相関関係が確認された($r = .459$ 、 $p > .01$)。各変数に関しては、「親の応答的な関わり」、「子育てで重視していること(社会情緒面のスキルおよびそれ以外のその他の側面)」、「配偶者の精神的なサポート」に、子どものレジリエンスとの適度な水準の正の相関が見られた($r = .404$; $r = .454$; $r = .435$; $r = .341$ 、 $p > .01$)。一方、「懲罰的でないしつけ」、「配偶者の育児サポート」、「現在の生活に対する母親の満足度」には、子どものレジリエンスとの低水準の正の相関が確認された($r = .181$ 、 $p > .05$; $r = .237$ 、 $p > .01$; $r = .150$ 、 $p > .05$)。

子どものハピネス(QOL)に関しては、「親の応答的な関わり」と「懲罰的でないしつけ」に適度な水準の正の相関が見られた($r = .317$; $r = .310$ 、 $p > .01$)。一方、「子育てで重視していること(社会情動面のスキルおよびそれ以外のその他の側面)」、「配偶者の育児サポート」、「配偶者の精神的サポート」、「現在の生活に対する母親の満足度」には低水準の正の相関が確認された($r = .252$ 、 $p > .01$; $r = .251$ 、 $p > .01$; $r = .185$ 、 $p > .05$; $r = .271$ 、 $p > .01$; $r = .214$ 、 $p > .01$) (表3を参照)。

表 3: 5歳児に関するピアソン相関分析

変数	X1	X2	X3	X4	X5	X6	X7	Y1	Y2
[養育態度] 親の応答的な関わり (X1)	1	.124	.399**	.321**	.075	.158*	-.321**	.404**	.317**
[養育態度] 懲罰的でないしつけ (X2)		1	.181*	.120	.163*	.138	-.127	.181*	.310**
[子育てで重視していること] 社会情動面のスキル(X3)			1	.752**	.120	.210**	-.285**	.454**	.252**
[子育てで重視していること] 社会情動面以外のその他の側面 (X4)				1	.250**	.282**	-.195**	.435**	.251**
[配偶者のサポート] 育児のサポート (X5)					1	.720**	-.210**	.237**	.185*
[配偶者のサポート] 精神面のサポート (X6)						1	-.168*	.341**	.271**
現在の生活に対する母親の満足度(X7)							1	.150*	.214**
子どものレジリエンス (Y1)								1	.459**
子どもの QOL(Y2)									1

注: ** $p > .01$ 、* $p > .05$

7歳児のレジリエンスとハピネス(QOL)に影響を及ぼす要因

7歳児のレジリエンスとハピネス(QOL)の間には、適度な水準の正の相関関係が確認された($r = .622$, $p > .01$)。各変数に関しては、「親の応答的な関わり」、「子育てで重視していること(社会情動面のスキルおよびそれ以外のその他の側面)」に、子どものレジリエンスとの適度な水準の正の相関が見られた($r = .529$; $r = .492$; $r = .496$, $p > .01$)。一方、「懲罰的でないしつけ」、「配偶者の育児サポート」、「配偶者の精神的サポート」、「現在の生活に対する母親の満足度」には、子どものレジリエンスとの低水準の正の相関が確認された($r = .136$, $p > .05$; $r = .170$, $p > .05$; $r = .223$, $p > .01$; $r = .277$, $p > .01$)。

子どものハピネス(QOL)に関しては、「親の応答的な関わり」、「子育てで重視していること(社会情動面のスキルおよびそれ以外のその他の側面)」、「現在の生活に対する母親の満足度」に、子どものハピネス(QOL)との適度な水準の正の相関が見られた($r = .498$; $r = .444$; r

= .465、 $p > .01$; $r = .363$ 、 $p > .01$)。一方、「懲罰的でないしつけ」、「配偶者の育児サポート」、「配偶者の精神的サポート」には、子どものハピネス(QOL)との低水準の正の相関が確認された($r = .287$; $r = .248$; $r = .275$ 、 $p > .01$) (表4を参照)。

表4: 7歳児に関するピアソン相関分析

変数	X1	X2	X3	X4	X5	X6	X7	Y1	Y2
[養育態度] 親の応答的な関わり (X1)	1	.130	.414**	.481**	.323**	.375**	-.161**	.529**	.498**
[養育態度] 懲罰的でないしつけ(X2)		1	.223**	.246**	.098	.107	-.161*	.136*	.287**
[子育てで重視していること] 社会情動面のスキル(X3)			1	.787**	.201**	.248**	-.202**	.492**	.444**
[子育てで重視していること] 社会情動面以外のその他の側面 (X4)				1	.293**	.316**	-.204**	.496**	.465**
[配偶者のサポート] 育児のサポート (X5)					1	.836**	-.133*	.170*	.248**
[配偶者のサポート] 精神面のサポート (X6)						1	-.107	.223**	.275**
現在の生活に対する母親の満足度(X7)							1	.277**	.363**
子どものレジリエンス (Y1)								1	.622**
子どもの QOL(Y2)									1

注: ** $p > .01$ 、* $p > .05$

考察

本調査の対象である5歳児および7歳児の母親たちの大半はワクチンを受けていたが、調査データを収集した時期にはロックダウンが実施されていた地域に住んでいた。新型コロナのパンデミック中は、タイ都市部の多くの学校がハイブリッド型学習を行っていた。両グループの子どもたちは屋外で遊ぶ時間が減り、5歳児は屋内で遊ぶ時間が増えたが、7歳児は屋内で遊ぶ時間に変化がなく、代わりに家で学習する時間が4倍になり、毎日1時間であったところが4時間に増えた。両グループの母親たちは子どものデジタル視聴時間が増えたことを心配しており、他の子

どもたちと社会的に遊ぶスキルが身につかないのではと考えていた。これについては、NakchuenとKhayankijの研究でも指摘されており(Nakchuen & Khayankij, 2021)、パンデミック中に両グループの子どもたちの間で一人遊びや平行遊びが増えたことから伺える。

本調査の結果から、子どものレジリエンスおよびハピネス(QOL)と正の相関が見られる一連の要因が判明した。すなわち、母親の子育て観、幼児教育(ECEC)の質とサポート、配偶者のサポート、活動／遊びの時間、ICT活用、子どもの教育への親の関わりなどである。子どものレジリエンスとハピネス(QOL)の間には、両グループとも、適度な水準の正の相関関係が見られた。幼児教育と学校の質とサポートは、両グループとも、子どものレジリエンスと適度な水準の正の相関がある一方、ハピネス(QOL)に関しては5歳児よりも7歳児のほうが強い正の相関が確認された。また、5歳児の大半は毎日30～60分ほどオンライン学習に取り組んでいるが、7歳児の方は学習タスクのレベルが上昇するため、オンライン学習に毎日3～4時間を費やしていることが明らかになった。教師がオンライン学習を介して子どもとの関係を深めることができるのであれば、子どもにとってはポジティブな結果と言えるだろう。

5歳児については、「親の応答的な関わり」と「子育てで重視していること(社会情動面のスキルと社会情動面以外のその他の側面)」が子どものレジリエンスにポジティブな影響を及ぼしているが、子どものハピネス(QOL)にとっては「養育態度(応答的な関わりと懲罰的でないしつけ)」の方が「子育てで重視していること」よりもポジティブな影響力があった。一方、7歳児については、「親の応答的な関わり」、「子育てで重視していること」、「現在の生活に対する母親の満足度」が子どものハピネス(QOL)に及ぼすポジティブな影響力が大きかった。興味深いことに、親の多くが厳格主義であるにもかかわらず、5歳児の親のほうが7歳児の親よりもいろいろな体験をさせ、子どもに期待するものが大きい傾向にある。CharoenjitとNgernlangtaweeの研究(Charoenjit & Ngernlangtawee, 2021)によると、タイの親の間では厳格な育児スタイルが最も一般的であるが(59.6%)、そのうち17.2%のみが高圧的なしつけをしていると判断されている。これは、厳格主義の子育てをする親は厳しいが思いやりのある態度で子どもに接し、家庭のルールをわかりやすく子どもに説明しているのに対し、権威主義の子育てをする親はただ厳しいだけで、子どもに有無を言わず言いつけに従わせているという違いを示している。

幼い子どもの精神面の健康を促進するためには、先生が思いやりのある温かい態度で

子どもに接し、子どもの気持ちを尊重するという関係が必要不可欠である。また、先生と親との間の連携も欠かせない。また、精神的な支えになる配偶者のサポートも、新型コロナパンデミックのような危機的な時期において、母親のストレスを軽減する効果があることから、5歳児のレジリエンスに良い影響を及ぼす。Kurianらのレポート(日付不明)によると、コロナ禍において、親は家庭における子どもたちの生活ルーチンと学習に最も重大な責任を担っていると述べている。親は、子どもと一緒に遊ぶなど、子どものニーズに適切に応えなくてはならず、先生はこうした親たちをサポートする必要がある。こうした努力は、子どもの社会情動面の健康を促進させる。このレポートでは、親が子どものICT活用に関わることは、子どものレジリエンスとハピネス(QOL)にポジティブな影響を及ぼしていると指摘している。特に、学習タスクのレベルが高くなる7歳児の方が、受ける影響が大きいことが明らかになっている。

結論として、コロナ禍においては、親が意識を高め、子どもとの関わりを深めることが必要とされる。コロナ禍以前は先生や友達と過ごす時間が多かったが、現在は親がその分、子どもと過ごす時間を増やさなくてはならない。その一方で、親は自分自身も大事にする必要がある。親のウェル・ビーイングは子どものウェル・ビーイングにつながるからである。また、学校や政府はこうした家庭を支援する必要がある。Baçeliらの研究(2021)によると、子どもをもつ家庭は教育、情報、精神面という3方面のサポートを必要としている。

本研究の結果と限界

本調査はバンコクの首都圏にある6校のみからデータを取得した。今後の研究では、調査対象をさらに増やし、変数項目の相関関係を検証する必要がある。さらに、母親たちの考えや気持ちを深く掘り下げて理解するために定性調査の実施も望ましい。

参考文献

Bağçeli Kahraman, P., & Apak, Y. M. (2021). Preschool teacher opinions on adaptation to school during the COVID-19 pandemic. (「新型コロナウイルスパンデミックにおける学校への適応に関する幼稚園教師の意見」) *International Online Journal of Primary Education (IOJPE)*, 10(2), 432-455.

<http://www.iojpe.org/index.php/iojpe/article/view/180/175>

Charoenjit, S., & Ngernlangtawee, D. (2021). The association between parenting styles and behavioral problems in children. (「親の育児スタイルと子どもの行動障害の関連性」) *Vajira Medical Journal: Journal of Urban Medicine*, 2021(65 Suppl), S53-62.

<http://dx.doi.org/10.14456/vmj.2021.52>

Fry-Bowers, E. K. (2020). Children are at risk from COVID-19. (「新型コロナウイルスによって子どもたちが晒されるリスク」) *Journal of Pediatric Nursing*, 53(2020), A10-A12.

<https://doi.org/10.1016/j.pedn.2020.04.026>

Imran, N., Zeshan, M., & Pervaiz, Z. (2020). Mental health considerations for children & adolescents in COVID-19 pandemic. (「新型コロナウイルスパンデミックにおける児童・青少年のメンタルヘルスの検討」) *Pakistan Journal of Medical Sciences*, 36(COVID-S4), S67-S72.

<https://doi.org/10.12669/pjms.36.COVID19-S4.2759>

Kurian, A., Singh, D., & Datta, V. (n.d.). *Family at the forefront of children's wellbeing and happiness in COVID times*. (「コロナ禍における子どもの健康と幸福を守るために最前線に立つ家族」)

<https://aud.ac.in/happiness-in-covid-times>

タイ保健省(2020年3月19日). *Measures and guidelines for prevention and control of coronavirus disease (COVID-19)*. (「新型コロナウイルス感染症の予防・管理のための対策およびガイドライン」) タイ保健省 疾病管理局.

Nakchuen, P., & Khayankij, S. (2021). Parents' roles in promoting play for preschoolers in Bangkok. (「バンコクにおける未就学児童の遊びを促進する親の役割」) *An Online Journal of Education (OJED)*, 16(2), OJED-16-02-006.

UNICEF. (2020年4月14日). UNICEF reveals impact of COVID-19 to children and youth in
タイ. (「ユニセフ、新型コロナウイルスがタイの児童や青少年に及ぼす影響を発表」)

[https://www.unicef.org/thailand/th/press-releases/ยูนิเซฟเผยผลกระทบโควิด-19-
ต่อเด็กและเยาวชนในประเทศไทย-พบเยาวชน-8-ใน-10](https://www.unicef.org/thailand/th/press-releases/ยูนิเซฟเผยผลกระทบโควิด-19-
ต่อเด็กและเยาวชนในประเทศไทย-พบเยาวชน-8-ใน-10)